
勇者の新たな冒険 ～日本と言う世界での戦い～

大樹の心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者の新たな冒険 ～日本と言う世界での戦い～

【Nコード】

N6610Y

【作者名】

大樹の心

【あらすじ】

剣と魔術の世界『ドルガミン』から、現在の地球『日本』に異世界トリップをした勇者マレト。見た事もない建物や高度な乗り物などに驚き戸惑う勇者だが、オタクと言われる仲間達に巡り会い、日本での生活に少しずつ慣れながら成長をしていく。しかし、ある男と出会う事によってその事態が一変する。ゲームでしかありえない『剣術や魔術』と、現代の技術が作り上げた『高度な武器』の数々・・・それがぶつかり合う激しい戦いが現在の日本を舞台に繰り広げられる

魔王なき戦い

曇り空に包まれた暗がりの城中で、屈強な戦士達が武器を手に取り戦いを凌ぎあつ。

剣と剣がぶつかり激しい金属音を響かせ、弓矢に射抜かれた戦士が苦悩の表情を浮かべ倒れ死に至る。

畏のように城壁から槍が突き出し、声を上げる間もなく串刺しにされる戦士達。

神秘的とも思える魔術の光を扱う魔法使いが、爆発音とともに立ちはだかる者達をなぎ倒す。

あらゆる所で血しぶきが上がり、無残な惨劇を繰り広げる。

その城では数千にも及ぶ者達が、それぞれの武器と知恵を使い生死を分けた戦いを続けていた。人として生きる為の自由を求めた戦いを……

この世界の名前は『ドルガミン』。1年前までは凶悪な魔族達がその全てを支配していた世界だ。

1年前の『魔王』と『大賢者』の死闘……繰り出す魔術のぶつかり合いによる壮絶な戦いは、共倒れという結末を持って終焉を迎えた。

それから数日のち、我が物顔で世界を支配し続けていた魔族達が瞬く間に消えうせ、この世界は平和に包まれたかと思われた。しかし、

魔族がいなくなるとすぐに人間達の野心が芽生え始める。

バージャス国がその圧倒的な軍事力によりドルガミンを支配してしまっただ。

理不尽な法律により人々を苦しめ、国に属する者以外は皆奴隷として扱われる。そんなすさんだ世界と化してしまっただルガミンを救うべく立ち上がったのが、『魔王を倒せる唯一の勇者』と言われていた若き少年だっただ。

勇者は、奴隷と化していた人々に戦意を取り戻すと、共に武器を手に取り、バージャス国に攻め入っただ。

今、まさにここで繰り広げられている死闘が、そのバージャス国と奴隷との、自由を求めた戦いであっただ。

その城中の奥にある王の間。そこでは、激しく活気だっただ戦いを続ける城内とは違い、静けさすら感じる無音の空気を作り出している。そんな王の間で、地位の違いを感じさせる金の光沢いい鎧に身を包んだ若者と、その若者より更に幼く見える10代半ばほどの少年が剣を片手に睨みあっただ。

その2人が繰り広げた戦いの激しさが、崩れかけた城壁からも目に見て取れる。

「てやあ〜!!!」

重い重装備をした鎧より身軽さを優先した身なり。そんな幼き少年が軽快に跳ね上がると掛け声とともに剣を振り上げた。

キンツ!!!

戦いの中ではもう聞きなれた剣と剣が交じり合う金属音。

重なり動きを止める剣と剣の合間からじりじりと睨み合う2人の目と目。

「ふん……対した事ないな……」

若者が鼻につく枯れた声でそう言うと、少年の胸元にあてがうように手のひらを差し出す。すると少年の胸元が一瞬にして赤く輝きだした。

『ボン！！！！』つという爆発音と共にその光が破裂をする。少年は大きな悲鳴を上げながら、その身体を崩れかけた城壁まで吹き飛ばされた。ぶつかり崩れる城壁に埋もれた少年が、動かぬ身体のまま若者を睨む。

「……魔術？……つつ……強い……」

その剣術から、数多くの猛者と言われる剣士や獰猛な魔族達を地に沈めてきた少年。その少年が驚きおのくほどのその実力。睨まれた若者は、不気味に微笑むと颯爽とした足取りで金の鎧を揺さぶりながら少年に歩み寄った。

「『ドルガミンで最強の魔剣士』と言われていたこの俺だ……魔王亡き後、この私を脅かす者などどこにも存在しない。」

「くそ！！食らえ！！！」

その自信ある涼しげな表情に苛立った少年は、理性を失い持てる魔術を繰り出し若者に向かって連打した。

その白く光る激しい魔術を正面から受ける若者の身体が、爆発の煙の中に包まれ消えていく。

「ゴホゴホツ・・・煙がすごいな・・・こんな魔術は平気
だけど、煙は少し苦手かな・・・」

その魔術を馬鹿にするように、目の前の煙を手で大きく振り払いな
がら不敵な笑みを浮かべる。

ザクツ!!!

剣で何かを切り裂く鈍い音が王の間に響き渡る。すると、涼しげだ
った若者の顔から瞬時に血の気が引いていく。そして、目を見開き
冷や汗を流すとその場に力なくうずくまった。

倒れる若者の背後には、いつの間にかその少年が息を切らせながら
立っている。魔術で気を引き、その背後から若者を切り裂いたのだ。

「くつくそ・・・やるじゃないか、勇者マレト。さすが、『魔
王を倒せる唯一の勇者』と言われていただけはある・・・」

5

滲むように金の鎧を赤く染めていく若者。背中痛みをこらえなが
ら、苦しい表情で少年、勇者マレトを睨んだ。

するとマレトが、若者に向け剣をまっすぐ突き出し答える。

「この世界を、お前の自由にはさせない・・・バージャス国の
若き王子、バルジル!!!」

そして2人がまた睨み合うと、王子バルジルがニヤツと微笑むよう
に口先を上に向けた。

「魔王と大賢者が死闘を繰り広げ、共に死してから1年。魔族も消

え王も倒れ、この世界の全てが俺の思い通りになると思っていたのに……勇者と言う邪魔者が、まだ居た事を忘れていたよ……お前も魔王や大賢者と共に、死んでしまえば良かったのにな！」

そう言うと、持つ剣でマレトの剣を払いのけ、大きく後方に飛び跳ねた。そしてまた、戦いの意志を示すように剣術の構えをしながらマレトを睨み叫ぶ。

「しかし、俺は負けない！！この世界は俺の物なのだ！！」

睨まれた目を真っ向から受けながら、勇者マレトもバルジルを鋭く睨んだ。

「そんな事はさせない！！必ず平和なドルガミンを取り戻すんだ！！」

2人がその想いを叫ぶと、また大きく剣を振り上げ跳ねるように駆け寄る。

「いやああ！！！！」

「てやああ！！！！」

そして、2人が衝突するその時！魔術に似た青い光がその付近一帯を包み込む。そして、聞いた事もない妙なワープ音が、王の間に響き渡る……

……勇者マレトはその光に包まれ、飲まれるように消えていった。

太陽が輝く空……それを覆い隠すほどの高さで立ち並ぶ、数多くの高層ビル。そのビルの陰と太陽の光が街中にメリハリある色を添える。

車道には、車が長い渋滞の列を作り、都会のスクランブル交差点では、多すぎる人ごみがギリギリの距離感でのすれ違いを繰り返す。そこは日本のコンクリート社会のど真ん中、東京だ。

そんなビルの一角奥地にある暗がりにも包まれた静かなごみ置き場。人気のないその場所が一瞬だけ強い光沢に包まれる。そう……魔術に似た青い光に……するとその場に現れるつぶらな瞳をした黒髪の少年。手に持つ剣と身にまとう勇者の服。胸元には先ほどのバルジルから受けた魔術の後がしっかりと残っている。

「えっなんだ？……バルジルの魔術??」

いきなりの事態に驚いたマレットは、その事態をバルジルの魔力だと勘違いをしてしまった。そして、そうではない事に気がつくと、剣を身構え機敏な動きで周りをキョロキョロと見渡す。そこに見えるのは、今まで見た事もない建物や景色の数々。

ドルガミンという異世界の勇者が、現在の日本へと時空異空のトリップをしたのだ。

こうして、勇者マレットの異世界『ドルガミン』とは違う『日本』での新たな冒険が始まった。

1、ドルガミンとは違う別世界

ブウン・・・ファンファン!!

車のエンジン音とクラクションがこだまする街中。歩道には、足早に歩き去っていく会社員達がチラホラ見受けられる。その街中をビルの合間の細い路地から覗くようにゆっくりと顔を出す少年が・・・そう、勇者マレトだ。そのすぐ近くをサラリーマンが過ぎ去ると、驚いたように出した頭を素早く引っ込める。そして、しばらく時間が経つとまたゆっくりと顔を覗かせる。その表情は、野生の猿のように純粹で、動きも敏感だ。ちよつとした音や動きにもすぐに反応を示す。そしてまた数人の大学生グループがしゃべりながらその前を通ると、驚き焦る動きで瞬時に頭を引っ込めた。ビルの壁に背中がくっついていてるかのように張り付き、息を呑み、動きを固めるマレト。

「これはいったいどういう事なんだ？ここはどこだ？ドルガミンでは見た事ない場所だけど・・・」

目に映る目新しい建物と不思議な服の人々。マレトは、あまりにも予想だにしなかったその事態に困惑をしていた。そして、大きく息を吸うと、何とかその気持ち落ち着かせるように、その全ての息を吐き出した。そして、心配そうな顔で手のひらに目をやると『ボワツ』っと白く輝く玉を魔術で作り上げる。

「よし！大丈夫だ・・・魔術は使える。」

予想外の事態に不安になったマレトは、自分の魔術が使えるかどうかを確かめた。そして、その腰にくくりつけてある剣に手を添える

と、見開いた目で脅えながら唾をぐくりと飲み込む。

「ここでじっとしていても何も変わらない……僕には魔術も剣術もある。僕はドルガミンで魔王を倒せるとまで言われていた勇者だ。襲われたって……勝てるはずだ!!」

自分にそう言い聞かせるように独り言を呟くと、マレトは意を決して勢い良くその街中に飛び出した。あからさまに戦いの意思を示してしまっではまずいと思ったマレトは、剣を身構えることなく足を大きく開き、腰にある剣に両手を添えて『いつでも剣を抜ける構え』で人々を睨むように見渡す。

「ちよつと何あれ……」

「バカ！見るな見るな！！やばいってあいつ……」

「何かの撮影??」

「んなわけねーだろ。コスプレだよコスプレ！！だつせえ……」

聞こえてくる近くのカップルの会話だけではなく、少し離れた人達もそんなヒソヒソ話をしているのがその目線と動きだけで見てわかった。場違いなマレトの容姿に東京の人々は冷たく、何だか見てはいけない物を見るような扱いだ。そんな態度を示す人々を見ても恥ずかしいとも思わないマレトは、むしろ襲う気配のないその態度に極度の安心感を味わっていた。そして、安堵の表情を見せると、力を抜くようにその構えた体制を崩し堂々と前へと歩き出した。

その容姿に驚き振り返る東京の人々を無視して歩き進んでいくマレ

ト。少しずつ見慣れだしたその景色をもう一度ゆっくりと見上げるように見渡す。そして、口を開いた圧巻の表情を作るとポツリと言呟いた。

「すごい文明だな……………」

明らかにドルガミンの世界とは違った、高度で不思議な日本の文明。ドルガミンに広がっていたのはまさに中世ファンタジーの世界そのものだった。草原に森に川に山に、時たま見受けられる小さな町や城。それがここ日本では硬いコンクリートで固められた高い建物が立ち並び、走り去る意味不明な機械が所狭しと動き回っている。あまりにも違いすぎるその世界を目の当たりにしたマレトは、自分に置かれたその立場をようやく理解し始めたようだ。

「間違いない……………異世界に迷い込んだみたいだ……………」

それに気づくと、その表情を不安の色に曇らせ始める。

今までに一度も経験した事がない異空トリップ。もちろんそんな話だって誰からも聞いた事などない。実際そんな立場に自分が置かれてしまって、いったいどうやったら元の世界に戻る事が出来るのか……………マレトにはドルガミンに戻る方法などまったく検討がつかなかった。そんな想像を頭に思い描くと、歩く足取りも重くなり、目線も下へ下へと落ち始める。それでも、何とかもう一度戦意を取り戻すように『キツ』と前を見て呟いた。

「戻らなきゃダメだ……………僕にはやり残した事がある……………」

その頭に思い描くのは、バージャス国王子、バルジルとの死闘。ドルガミンの平和を取り戻す為にもバルジルの倒さなければならぬ。そしてまた新たに、勇者である自分がいないドルガミンのあり様を頭に思い描いた。そこに映し出されるのは略奪や惨劇の数々。罪なき者が殺され、人々が恐れながら生活をするその姿。そんな想像を消し去るように頭を振ると、もう一度周りを見渡してどこ向かうわけでもなく前へ前へと駆け出していった。

走るマレトの足だけでは、たどり着けるはずの無い別世界のドルガミン。それでもマレトは、東京の街中にある雑踏を掻き分け、無我夢中で悲しく走り続けた。

2、タクシーに乗る勇者

東京の街中を走り、探し続けるマレット。探すのはあの不思議な光・
・・・魔術に似た青い光だ。立ち止まっては周りをキョロキョロと
見渡し、また駆け出しては立ち止まり、周りをキョロキョロと見渡
す。何度となくそんな事を繰り返すとさすがに疲れ果てたのか、駆
け足を歩きへと変えてしまう。そしてついに立ち止まると、諦めた
ようにその道端に座り込んでしまった。

どこを探しても見つからないその光。もちろんその光というのは、
日常的に現れる物ではなく何らかの理由で作られた特別な光、そん
な光など探して見つかる物でもない事ぐらいは、当の本人が一番良
くわかっていた。それでも、じつとしていられないのは人間の本能。
とにかく何かをしていなければ『元の世界に戻れない』という極度
な不安に襲われてしまうのだ。しかしもう何もかもをやり尽くして
しまったマレットは、座り込みながらアスファルトに大粒の涙をこぼ
し始めた。

・ ドルガミンに帰れない悲しさを、涙という形に変えるように・・・

無情にも、そんなマレットを見ても、見てみぬ振りをして歩き過ぎ去
っていく日本の人々。マレットを哀れむ人など1人もいなく、喋りか
けてくれる人もいない。それもそのはず、それがこの世界での一般
的な常識の冷たい態度だからだ。

そんな冷たい態度をする人々に腹を立てたマレットは、全てが投げや
りな気持ちになってしまった。そして、その怒りをぶつけるように
周りに持てる魔術全てを繰り出してやろうと手をかざした。

するとふと、一つの物体にマレットの目が止まる。そして不思議そう

に今まで見た事がないその物体を見つめ続けた。ずっとうるさい音で、すばしっこく動き回っていた意味不明なその物体……その車だ。

不規則な動きをしながら高速スピードで移動をするその乗り物。マレトは立ち上がると、最後の望みを託すように車道に停めてある1台の車に歩み寄っていった。

マレトが近づくと、その後部座席のドアが自動で開く。マレトは一瞬驚くと、そのドアからゆっくり中を覗かせ運転手に話しかけた。

「あの……すみません。ドルガミンまで連れて行ってくれませんか？」

「あつ??ドルガミン??オロナミンだからポピタンだか知らねーけど、この車はタクシーだから!どこへでも連れてってやるよ!」
笑顔で答えるタクシー運転手。その自信ある運転手の表情を見たマレトは、途端に幸せそうな満面の笑みを作った。そして車に乗り込むとすぐにお礼の一言を言う。

「あっありがとうございます!!宜しくお願いします!!」

この時マレトは、この異世界の人達にとっては異空トリップが当たり前で、この不思議な乗り物を使って異世界との行き来をしているのだと、完全な勘違いをしまっていた。そんなマレトを乗せた東京のタクシーは、行ける筈のない別世界のドルガミンへ向けて、都会の道を走らせるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6610y/>

勇者の新たな冒険 ~日本と言う世界での戦い~

2011年11月21日20時06分発行